

家族と家族幻想 1

坂口 伊都



家族は不思議だ。

大事なものでもあるが、時として呪縛にもなり、苦しめる存在になると感じるのは私だけなのだろうか。

最近感じているのは、プライベートでも仕事でもいろいろな出会いがあり、うれしいことも悲しいことも随分と経験してきたような気がする。それだけの年月を経てきたという年齢に入ってきたのかも知れない。その中で、「家族」って何だろうと思いつき返すことが増えてきた。家族が、一言で言い表せるものではないこともわかっている。それでも、問いかけてみたい気持ちが居続けている。

ご存知の方もいると思うが、昨年夏まで里子と暮らしていた。その子と週末里親等で、これか

らも何らかの形で繋がっている大人でありたいと願っている。

この子にとって、里親の生活が、家族がどのような存在としてあり続けるかはわからない。ただ、この子に「お母ちゃん」と呼ばれ、この子の母だと思える感覚は、別の場所で暮らすようになってからもそのまま私の中にある。そして今日までこの子のことを思わなかった日はないし、この子に辛い思いをさせてしまったのではないかと自問する言葉が相変わらず脳裏に浮かぶ。この子が大人になっていく過程で、家族について思い悩む時が来た時、私に何ができるのだろうか。何ができるかはわからないが、家族について向き合い整理をすることぐらいはできる。せめてできることは、後回しにせずにしていこうと思う。

また、仕事を通していろいろな家族に触れさせてもらっている。その中に出会う家族には必ずと言っていいほど葛藤があり、怒り、悲しみ、寂しさ、辛さというようなネガティブな感情を抱き、思い出さないように記憶に蓋をしていたり、親から暴力を受けていても「普通の家族」だと信じよ

うとし、「私の目標は自分の親」だと話す人もいる。そこにある葛藤はそうとうに大きく、聞いているこちらが息苦しくなる時もある。

私自身も家族の葛藤は物心ついた頃から、横にいた。家の中に母親はいるが、父がいたことはなかった。写真の中で小さな私を膝に乗せている父親しか知らずに育った。母は、「あなたのお父さんは猫の子捨てるかのように私たちを捨てたのよ。大きくなったら仕返ししようね」と子守唄のように私に聞かせた。私は、見た記憶もなく実態の持てない父親を恨むなんてことはできず、その言葉をただ聞き流していた。それよりも母の激しい気性の方が厄介で、どう安全に過ごすか作戦を立てる方が忙しかったと言い直した方がいいかも知れない。

私の小学校時代の名簿は、男の子が上段で女の子が下段、子どもの名前前の横には父兄欄があり、男名前が並んでいる形だった。私は、学年が変わる度に父兄欄を確認した。すると女名前はクラスに一人か二人しかいなく、「やっぱりな」と呟く私が出て、どこかでもっと仲間が増えないか期待していたが毎年裏切られた。

家の中に父親がいないことが当たり前の家庭だったが、急に父親と会うように母から言われた。確か中学2年生の頃だったように思う。母は、自分の力だけではこれからお金が足りなくなるから父親に会ってお金をもらってこいという趣旨のこ

とを私に言った。母によると、父母が別れる際、父親側に弁護士が立てられ、父に会いに行く時はお金を支払わなければならないという約束事が交わされたそうだ。結局、父に会うためにお金を支払ったことはなく、気性の激しい母親対策だったのではないと思う。母も、子どもを抱えて生きていくことに必死だったのだろう。そうであっても、子どもだった私にはピンとこなかったし、大人の勝手に振り回すのは勘弁してくれと思っていた。

私から父親に会いたいなんて一言も言ったことないし、これっぽっちも思っていないのに、娘が会いたがっているという理由で父に会うはめになった。父自身は子どもがいないと豪語し、子どもを育てたことがない人だった。お互いに会いたいと思っているわけでもなく、ただ圧力に屈しただけで、初めて見る父親の印象は、どこかのおじさんだった。よくドラマとかで、道ですれ違うだけで血のつながりのある親子はピピッと何かを感じるというシチュエーションが演出されていたが、それは真っ赤な嘘だと思った。父親にいい印象も悪い印象も持てずにいたからなのかも知れないが、緊張だけして感情が動かず淡々としていた。

日常生活の中でほとんど、おじさんと話す機会がなかった私は、父を前にしてもテンションもあがらず、ほとんど喋れなかった。父の方も困ったのだろう、「学校の勉強は何が好きだ？」という気の利かない話しか出ず、全くもって使えない似た者親子だった。会食の終わりには、母から言い渡されていた、お金をくださいと言うミッションがあり、それを言った時の父の嫌そうな顔が忘れられない。それから、父と会うのが苦痛以外の何者でもなかった。途中から、母親の言うとおりに動くところくなことが起きないと気づき、母からのミッションを聞き流すことにした。別れ際を濁す必要もないし、その方が楽で父との関係も良好に終えられた。

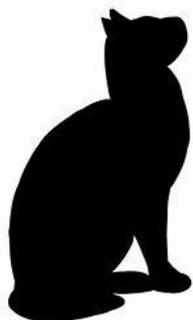
父と友好関係ができたのは、私が就職してから



だった。化粧品会社に勤め、苦手な上司（もちろん、おじさん）と出張に行くことが決まり、何とか怒られないようにと商品の勉強をし、説明できるように準備をしていった。その出張で苦手な上司から「よく頑張ったな」と褒めてもらえた。それが、予想もしていないことだったので衝撃的に嬉しさが沸き上がった。それ以降、その苦手な上司と仲良くなれた。その経験を経て、父親にも笑いかけてみたらどうなるのだろうと思い、実践したらみごとに成功した。自分の気持ちに壁を作らなければいだけだとわかり、こんな簡単なことに10年も気づかなかった自分に呆れた。上司とのやり取りは、父とのリハビリになり、人との関係をどう作っていけばいいのかを教えてくれた。

今、思い起こせば私の周りには私を気にかけてくれるおじさんが何人かいた。無条件に可愛がってくれるのだが、「この人には実の子どもがいる、どう頑張っても私はその子たちには敵わない」と思って、甘えたい気持ちを抑えた。気を許して傷つくのが怖かった。でも、そのやさしいおじさんは、そんなに器が小さいわけではなかった人々のように思う。

逆に父親には、実子の私よりも父親の身近にいる子どもの方が親しみを持っているのだろうと悲観していた。遺伝子レベルでの近さが父との間にあるが、その事実が足枷となって余計に遠く感じる存在となっていた。普通の家庭にいる「父親」が何なのかわからなかった。それは、今も父親というものがよくわからない。子どもの頃の私は、それを知りたくて仕方がなかったし、知らないことが恥ずかしかった。



自分の家族を日々、営んでいるが、
家族ってもっと良いもののはずだと
幻想に陥ると、それに囚われて自分は
ダメなんだと思い込んでしまう。

そんなことは、割とよくあることの
ようだ。

父親は私の出自に直結することなので、自然と拘ってしまうが、父親と一緒に暮らせないことに拘り続けても、苦しいばかりでいいことは起きなかった。私をまず一番にかわいがってくれる人は父親であるべきで、その第一歩が叶わない自分は価値がないと思い込んでしまっていた。周りを見ればいろいろな人がいて、可愛がってくれる人も出てくる。周りにいるその可愛がってくれた大人と出会えた経験が、私の中で育てていて肩の力を入れずに人と向き合える土台をくれていることにその頃は気がつかなかった。親がなくても子は育つと言われるが、本当にそうなのだろうと感じる。理想の親に出会えなかったことに拘っても実りはほぼない。

母は、「子猫を捨てるかのように捨てられたのよ」の他に「あなたには家族はいないから、自分の家族を作りなさい」とよく言っていた。そう言われるたび、あなたと私は家族じゃないのか？と疑問に思ったが、何故か言い返すことはなかった。たぶん母親は私に良いことを言っているつもりで、それに水を差すのを控えていた。そして母は時々、「私はあなたがかわいい」と言っていた。その言

葉を素直に受け取っていなかったが、悪い気はしなかった。母が言う言葉として子守唄のように聞かされた二つの言葉よりも、ずっといいよと思う。母は、褒めたり可愛がったりすることが下手で、恥ずかしさが勝っているようなところがあり、「私はあなたがかわいい」という言葉が娘の気持ちを穏やかにさせるとそれほどわかっていなかったようだ。母親は、お金で愛情を図れると信じている節があり、それは子どもにとって、迷惑以外の何者でもなかった。誰にでも言えることだが、親だからといって立派になれるわけでもなく、不器用に振舞ってしまうことが起きるが、子どもへの影響力は大きいと知っている方がいい。

母は、どのような人生を送ってきたのだろう。お金の苦労したのか、お金が無くなることに恐怖を感じたのか、子どもを抱えて生き抜くための苦労は大きなものだったと想像に難くない。信じられるのは、人ではなくお金だったのだろう。頼った人に裏切られた経験もしているような気がするが、今もそれを確かめたいとは思っていない。

私はただ父親がいないというだけで、自分の身体に穴が空いているように感じていた。それをある人が、「この状況は、子どもの頃のあなたが何かをしてどうにかなるような問題ではない。このことについてあなたは、何も悪くない」と言ってくれた。それも、衝撃的だった。私自身も母親になっている年齢になっていたが、それまで誰もそんなことを言ってくれる人はいなかった。苦労したね、大変だったね、かわいそうと口にしてくれる人はいたが、どこか他人事のように受け止めて私を憐れんでいるか、己が放つ言葉で相手が傷つくのではないかと恐れているように聞こえた。その場面になると、居心地の悪さがあった。人は言葉そのものではなく、言葉を口にする人の気持ちを受け取っているものようだ。それは、いろいろな人の訴えを聞いていて感じている。

言葉は、その人が本当にそう思っていないと言葉にされても相手に共感していないと伝わり、嫌

な感じにしか残らない。この部分は、対人援助者の落とし穴かも知れない。子どもの頃のあなたに状況を変えることはできない。だからあなたに非があるわけではないという言葉には、責任が伴う。その責任を背負う覚悟がなければ言えない言葉なのだろう。そういう言い方をする人になかなか出会わない。それほど難しい言い回しではないと思うが、どこかタブー視され、そこまで言い切ってもいいのか、一援助者がそこまで立ち入ってもいいのかという感覚が強くなっているように見える。図々しくなれずに遠慮する感覚の方が勝るのかも知れない。その遠慮は、結果として相手との縮まらない距離感を作り、壁となり、わかってもらえないという印象を与えているように感じる。

家族の中でも親は特別な存在だ。大人になってからも、子どもとして親の機嫌を保たれるように奔走し、親の顔色を見ることに多大なエネルギーを使って疲労困憊しているなど感じる人に出会ってきた。そのことに囚われると、周りが見えなくなるようだ。親を敬い、大事にすることが子どもの役割だと信じ、親の言うことを聞き、親を立てなければならぬと頑張っているが、その親の言っていることが滅茶苦茶だなと感じる時がある。多分、この人が何をしてもその人の親のイライラはなくなることなく、怒りをその人にぶつけ続けてしまうのだろう。その状況は、家族の誰にとってもいいことがない。



そのような時、第三者が今までとは違う視点を投げ、違う選択肢も存在することに気づくと、少し冷静になって考えられるようになる。それは親を怨むとか、切り捨てるとかではなく、自分の親と距離を保つことができるようになっていく。自分は、いつまでも親の子どもではなく、我が子の親であることを優先することに責任を持てる方が、子どもにとっても、親である自分にとっても、子の祖父母にとってもいいと思う。家族のことだからこそ、第三者の言葉が新たな可能性をつかむきっかけを作るのだろうと思う。

人は、子どもの立場での家族と大人になってから作っていく家族がある。その過程で保護される者から脱却して、自分の足で生きていくことを学ぶ。母は、成人した私を手元に置き、自分の嘆きを聞いて欲しかった。母のやり方は、悪循環にはまっていくようで、このまま一緒にいると親子共々押しつぶされてしまうと感じ、家を出る道を探した。できるだけ、母の怒りスイッチを入れず、私自身も自分の足で生きてける選択を考え、家から通えない距離の大学を社会人入試で受験することを決めた。受験をする直前に母に話をすると、驚いてはいたが反対はしなかった。学費を工面するために父親に稟議書を作ってお願いをすると、父も「俺は頑張っているやつの応援をするのが好きだ」と言って、協力をしてくれた。

25歳になってから大学生になり、18歳の若者達が眩しく見え、社会人からの脱落したような気分になったが、もっと年上の社会人入試の方々にも出会い、当たり前ではない生き方もあるのだと知った。自分のけじめとして、母から渡されたお金を使わないと決め、バイトをいくつもしてきた。大学とバイトの日々で生活はきつかったが、自分で生き方を選択し、行動したこの時から自分の足で歩けたように感じた。自分と同世代に会うことはほとんどなかったが、年下や年上の人との出会いは数多くあった。小さな居酒屋でバイトしていた時も私を可愛がってくれるおっちゃんがあった。

社長の俺に愛想をしないとされたが、誰に対しても愛想のない私を面白がってくれたり、人生論を聞かせてくれたり、美味しいものを食べさせようとしてくれたり、酔って陽気になって財布を無くしたりもして、抜けている所も見せてくれていた。実家の店では、大学なんて行かずに結婚相手を探した方がいいと言う人が多くいたが、自分が実際に動く面白いことをしている人には出会えた。そして、私を支えてくれるのはおっちゃんだけでなく、おばちゃんも年下の友達もいた。子どもの頃は、親の影響を大きく受けるが大人になれば、面白い人の背中を見ることもできる。面白さを見つけられるかどうかは、私次第らしい。

子どもは親からの影響を大きく受ける存在だ。でも、親に自分の人生を合わせなくてもいい。親から離れて自分の人生に責任を持とうとすると、いろいろな人との出会いが起こる。その中に自分らしく生きるヒントがあるのかもしれない。

